様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２８ 年　 ６ 月 １６ 日現在

機関番号：３３９１１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2013～2015
課題番号：２５３７００６１

研究課題名（和文）＜関係＞概念に基づくヴァイシェーシカ学派の存在論の再評価

研究課題名（英文）Reconsideration of the Vaisesika Ontology through the Analysis of Relation

研究代表者
平野　克典（HIRANO, Katsunori）

同朋大学・文学部・その他

研究者番号：７０５１３７３７

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,500,000円

研究成果の概要（和文）：本研究の目的は、ヴァイシェーシカ学派の存在論の新たな側面を＜関係＞概念の分析を通じて明らかにすることである。本研究では、同学派が説く＜内属関係＞と＜結合関係＞の２種類の＜関係＞のうち、＜結合関係＞の概念分析を中心に研究が推進された。分析は、同学派のサンスクリット文献である『カテゴリーと法に関する綱要』（6世紀）とその注釈書群（10~11世紀）の「結合関係の考察の章」に基づいてなされた。各文献の「結合関係の考察の章」の翻訳と解説、そして、それらの分析を通じて、＜結合関係＞の概念を＜内属関係＞との相違から明確にした。

研究成果の概要（英文）：The project has analyzed of conjunction among two relations of inherence and conjunction under the purpose of reconsidering the Vaisesika ontology. The analysis has been made through the “Conjunction Chapter” in the Padarthadharmasamgraha (ca. 6th c.) and its three commentaries (ca. 10~11th c.). The project has showed the concept of conjunction in comparison with that of inherence together with the translation of the chapter in each texts with annotation and their analyses.

研究分野：インド哲学

キーワード：ヴァイシェーシカ　存在論　結合関係　内属関係　パダールタダルマサングラハ　ヴィヨーマヴァティー　ニヤーヤカンダリー　キラナーヴァリー

１．研究開始当初の背景

インド哲学の存在論において、ヴァイシェーシカ哲学の果たす役割は極めて大きい。それは研究にも比例して現れており、同学派の研究が存在論に特化していること、かつ他学派の存在論研究においてヴァイシェーシカ哲学の存在論が対比的に言及されることから確認できる。

ヴァイシェーシカ学派（インド実在論学派）の存在論に関する先行研究には、網羅的に同学派の体系（範疇論）を論じる B. Faddegon の *The Vaiśeṣika-System, described with the help of the oldest texts,* Amsterdam, 1918、漢訳のみ現存する同学派の論書『勝論十句義論』を扱った H. Ui の *The Vaiśeṣika Philosophy,* Varanasi, 1962、仏教論理学派との論争に言及しつつ同学派の実在論的存在論を概説した D.N. Shastri の *The Philosophy of Nyāya-Vaiśeṣika and Its Conflict with the Buddhist Dignāga School: Critique of Indian Realism,* Delhi/Varanasi,1964、また西洋哲学との比較も視野に同学派の存在論を論考する W. Halbfass の *On Being and What There Is,* New York, 1992 などがある。

これら視点を異にする先行研究の共通点は、主に実体（dravya）、属性（guṇa）、普遍（sāmānya）などの＜関係項＞（結び付けられるもの）に着目して同学派の存在論を分析している点にある。しかし、世界を事物の結び付いた複合体とみなす同学派の体系において＜関係＞（結び付けるもの、sambandha、relation）は副次的な要素ではなく、世界を構造化たらしめるに不可欠な主要素であり、学説の支柱である。とすれば、ヴァイシェーシカ学派の存在論研究は次に、＜関係＞に着目することをもって再評価される段階を迎えていると思われる。すわわち、関係項のあり方からではなく、関係項相互がいかに結び付いているかという構造化のあり方に着目した再評価である。

上記の着眼点は、研究代表者のこれまでの研究を通じてその必要性を認識するに至った。研究代表者の研究も先行研究と同様に、『ヴァイシェーシカ学派の普遍論』（修士論文題目）、「古典インド実在論研究―『ヴィヨーマヴァティー』の範疇論」（博士論文題目）、そして「ヴァイシェーシカ哲学における普遍の定義 ―*Padārthadharmasaṃgraha* の場合―」（『南都佛教』82 号）など、関係項に着目して同学派の存在論を分析してきた。しかし、博士論文の一部で＜内属関係＞を論究した結果、結び付けるものである＜関係＞概念に着目することで、結び付けられるものである＜関係項＞だけに着目した研究では明らかとはなっていない同学派の存在論の特徴や、さらに関係項そのものの新たな側面が明らかにできることを確認した。

研究代表者は本研究以前から、すでにその点に留意した研究を進めている。同学派が示す＜内属関係＞と＜結合関係＞という２種の＜関係＞のうち、＜内属関係＞に関する研究成果を単著として出版した（*Nyāya-Vaiśeṣika Philosophy and Text Science*, Motilal Banarsidass, Delhi, 2012）。そして、＜内属関係＞の研究を通じて、十分な研究が成されていない＜結合関係＞を精査する必要がある認識に至った。＜関係＞概念の総合的理解には、両関係の概念理解が不可欠である。また、両関係の定義を考察した結果、＜内属関係＞の理解には＜結合関係＞の理解を前提としていることが判明した。すなわち、＜内属関係＞のさらなる理解に＜結合関係＞の概念理解が不可欠であることが判明した。

このように、ヴァイシェーシカ学派に対する研究は、＜関係項＞に比して＜関係＞は十分に研究されておらず、また＜内属関係＞に比して＜結合関係＞の研究は皆無に等しい状況にある。同学派の存在論を再評価するという研究の全体構想を設定した上で、現状に不足している事項に着目するという着想に至った。すなわち、＜結合関係＞の概念を分析し、そして＜内属関係＞を踏まえた上で＜関係＞概念を総合化し、そこから同学派の存在論を明らかとする着想である。

２．研究の目的

本研究の全体構想は、インド正統哲学派のヴァイシェーシカ学派が説く、事物を結び付ける＜関係＞概念を考察して、同学派の存在論の新たな特徴を明らかにすることにある。従来の研究では、同学派の存在論が実体や普遍などの＜結び付けられるもの＞（関係項）に着目され考察されてきた。それ故、本研究では視点を変え、＜関係＞概念に着目した考察を推進して、同学派の存在論を再評価することを目指した。

上記の全体構想を見据えた本研究では、以下の４点を具体的な目的として設定した。

（１）＜関係＞の一種である＜結合関係＞の概念分析。

（２）他学派の言及する＜結合関係＞を考慮した重層的理解。

（３）＜結合関係＞の対概念である＜分離＞の分析。

（４）＜結合関係＞ともう一種の＜関係＞である＜内属関係＞の両概念に基づく＜関係＞概念の総合化。

上記の研究目的は主に、紀元前１世紀頃から紀元後 11 世紀までのヴァイシェーシカ学派のサンスクリット哲学文献の読解と分析を通じて推進された。具体的には、ヴァイシェーシカ学派の学祖とされるカナーダ

（Kanāda）の『ヴァイシェーシカ・スートラ』（*Vaiśeṣika-sūtra*）とその注釈書である学匠プラシャスタパーダ（Praśastapāda, ca. 550-600）の『パダールタ・ダルマ・サングラハ』（*Padārthadharmasaṃgraha*）、そして『パダールタ・ダルマ・サングラハ』に対する以下３つの主要な復注釈書である。すなわち、ヴィヨーマシヴァ（Vyomaśiva, ca. 900-960）の『ヴィヨーマヴァティー』（*Vyomavatī*）と、シュリーダラ（Śrīdhara, ca. 950-1000）の『ニヤーヤ・カンダリー』（*Nyāyakandalī*）と、ウダヤナ（Udayana, ca. 1050-1100）の『キラナーヴァリー』(*Kiraṇāvalī*、以下 Kir)である。

上記 5 文献は根本聖典、注釈書、復注釈書という関連性をもっており、＜結合関係＞の歴史的変遷を同学派の伝統に則して確認する上で最適な文献群といえる。

３．研究の方法

本研究は、紀元前１世紀頃から紀元後 11 世紀までのヴァイシェーシカ学派のサンスクリット哲学文献、『ヴァイシェーシカ・スートラ』、『パダールタ・ダルマ・サングラハ』、『ヴィヨーマヴァティー』、『ニヤーヤ・カンダリー』、『キラナーヴァリー』の「結合関係の考察の章」の読解と分析を通じて推進された。

「研究の目的」（１）～（４）に対する「研究の方法」は、以下の（１）～（４）に対応する。

（１）＜結合関係＞の概念分析

ヴァイシェーシカ学派の上記５つの文献に言及される＜結合関係＞に関する情報を収集、分析すると共に、翻訳を作成する（英訳と和訳）。主な分析箇所は、「結合関係の考察の章」である。また、復注釈書の１つである『ヴィヨーマヴァティー』に関しては、当該箇所のテクスト校訂も作成する。

（２）＜結合関係＞の重層的な考察

ジャイナ教の哲学書、空衣派の学匠プラバーチャンドラ（Prabhācandra、10-11 世紀）作『プラーメーヤ・カマラ・マールタンダ』（*Prameyakamalamārtaṇḍa*）に言及されているヴァイシェーシカ学派の＜結合関係＞に関連する議論を収集、分析する。

（３）＜分離＞の概念分析

＜結合関係＞の対概念となる＜分離＞（vibhāga）を上記の５文献に依拠し、分析する。

（４）＜関係＞概念の綜合化

研究代表者によってすでに研究が進められている＜内属関係＞に関する成果と本研究での＜結合関係＞に関する成果を総合的検討し、＜関係＞概念から見たヴァイシェーシカ学派の存在論の特徴を明らかとする。

４．研究成果

本研究の成果をまとめると以下のようになる。

（１）ヴァイシェーシカ学派の＜結合関係＞を『パダールタ・ダルマ・サングラハ』及び、その注釈書『ヴィヨーマヴァティー』、『ニヤーヤ・カンダリー』、『キラナーヴァリー』の「結合関係の考察の章」に依拠して、分析、考察した。その結果、＜結合関係＞の包括的理解への端緒を付け、もう一つの＜関係＞である＜内属関係＞との相違を明確にすることができた。

具体的な研究成果として２点示す。

①結合関係の関係項のあり方を示す「離れて成立（存在）しているもの（yutasiddha）」の概念を精査した。そして、内属関係が、その否定である関係項「「離れて成立（存在）していることのないもの（a-yutasiddha）」に存していることを踏まえ、両関係の関係項のあり方を踏まえた、両関係の相違を明確とした。

②＜結合関係＞と＜内属関係＞の関係項は、「保持者と被保持者」、「基体と付属者」、「拠り所と拠るもの」という術語をもって言及される。これら３術語の相違を明確にすると共に、同一の術語で言及される関係項に両関係が存している場合でも、その関係項のあり方には違いがあることを解明した。

（２）インドのマイソール大学の東洋学研究所にて、『ヴィヨーマヴァティー』の写本コピーを蒐集した。同コピーに基づき、『ヴィヨーマヴァティー』の「結合関係の考察の章」の校訂作業を行った。

『ヴィヨーマヴァティー』には２本の刊本が出版されている。２つの刊本はベナレス写本に基づく。ベナレス写本はマイソール写本の転写である。これまで、マイソール写本のマイクロフィルムが研究者間に流通しており、研究代表者も参照していたが白黒であったため鮮明ではなく、文字読み取りが困難な箇所があった。しかし、マイソール写本のオリジナルコピーを入手したことで、文字の読み取りが可能となった箇所があり、また転写者のものと思われる朱入りの加筆や訂正箇所を複数確認することができた。テクスト生成の足取りを辿る貴重な資料となり得た。

（３）ベナレスの Sampurnanand Sanskrit 大学の Sarasvati Bhavan 図書館を訪れ、所蔵されている『ヴィヨーマヴァティー』の写本の一部を閲覧、書写した。そして、（２）の校訂作業に活用し、校訂の精度を高めた。この訪問は、2014 年と 2015 年の各年度末に、それぞれ約一ヶ月間実施された。

（４）『ヴィヨーマヴァティー』の「結合関

係の考察の章」の翻訳を校訂テクストに基づいて完成させた。読解に際しては、インドのプネー大学大学院サンスクリット高等研究所元所長の V.N. Jha 教授の支援を仰ぎ、インドにて読書会を開催した（2015 年 3 月）。

以上の研究成果によってヴァイシェーシカ学派の＜結合関係＞の概念を巡る思想史構築を前進させ、＜関係＞概念の総合的理解に向けた基盤を形成することができた。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　６件）

① 平野　克典、*Padārthadharmasaṃgraga* とその注釈書における内属と結合の関係項（sambandhin）について、『印度学仏教学研究』63 巻 2 号、2015 年 3 月 20 日、pp. 210(885)-215(880)。査読有

② 平野　克典、内属（samavāya）の関係項の＜存在＞構造」、『インド哲学仏教学研究』22 号、2015 年 3 月 16 日、pp. 57-68。査読有

③ 平野　克典、古典ヴァイシェーシカ学派の＜関係＞概念の研究 —『ヴィヨーマヴァティー』の「内属関係の定義の章」の翻訳と注解（２）」、『東海仏教』59 号、2014 年 3 月 31 日、pp. 136(17)-123(30)。査読有

④ HIRANO, Katsunori, On the Concept of Ayutasiddha in the Definition of Inherence", *Sanskrit Studies Vol. 3., Saṃvat 2069-70 (CE 2013-14)*, Shashiprabha Kumar (ed.), New Delhi: Special Centre for Sanskrit Studies Jawaharlal Nehru University in associated with D.K. Printworld (P) Ltd., 2014, pp. 210-223. 査読有

⑤ 平野　克典、ヴァイシェーシカ学派の関係概念の研究 —『ヴィヨーマヴァティー』の「内属関係の定義の章」の翻訳と注解（１）」、『東海仏教』58 号、2013 年 3 月 31 日、pp. 222(13)-210(25)。査読有

⑥ HIRANO, Katsunori, An Annotated Translation of the Definition of Inherence (*samavāya*) Chapter in the *Vyomavatī*", *An Indian Ending, Rediscovering the Grandeur of Indian Heritage for a Sustainable Future, Essays in Honour of Professor Dr. John Vattanky SJ, On Completing Eighty Years*, Kuruvilla Pandikattu SJ and Binoy Pichalakkattu SJ (eds.), Delhi: Serial Publishers, 2013, pp. 135-153. 査読有

〔学会発表〕（計　３件）

① HIRANO, Katsunori, On the Relata (*sambandhin*) of Inherence and Conjunction in the *Padārthadharmasaṃgraha* and its Commentaries," 16th World Sanskrit Conference, Renaissance Bangkok Ratchaprasong Hotel, (Bangkok, Thailand), 2015 年 6 月 29 日。

② 平野　克典、ヴァイシェーシカ学派の ādhārya-ādhāra」、日本印度学仏教学会第 65 回学術大会、武蔵野大学、2014 年 8 月 30 日。

③ 平野　克典、内属関係（samavāya）から見るヴァイシェーシカ学派の＜存在＞の諸相、2011-2014 年度科研基盤研究(A)「インド哲学諸派における＜存在＞をめぐる議論の解明」、2013 年度合同研究会、名古屋大学、2013 年 8 月 23 日。

〔図書〕（計　０件）

〔産業財産権〕
○出願状況（計　０件）
○取得状況（計　０件）

〔その他〕
ホームページ等
無し

６．研究組織

(1)研究代表者
平野　克典　　（HIRANO, Katsunori）
同朋大学・文学部・非常勤講師
研究者番号：70513737

(2)研究分担者
なし

(3)連携研究者
なし